

石の仏に見る隠された顔

石仏のイコノロジー(2)

春日井 眞英

はじめに

石仏を、せきぶつと読むべきか、それともいしぼとけ、あるいはいしのほとけ、と読むかはその人の好みかも知れない。だが、読み方一つで受け止める側には大きな変化が生じることもあるようだ。鷲塚氏は大分県臼杵での体験を元に

現在でも古老は「石仏」という言葉をひどく場違いなものとして嫌い、何尊であろうと、磨崖に刻まれた仏様は全て「お地藏さま」と呼び親しんでいる。

と記し、地域の人々の受け止め方、心情について触れている。確かに、「せきぶつ」と読めば、十把一絡げになってしまい、一つ一つの石像に込められている意味が消え失せてしまうだろう。地藏には地藏の、観音には観音の持つ優しさと、それぞれの呼び方から、石の仏に対する思いが土地の人々の心根に触れているのかも知れない。だから、一般的な言い方で、土地の人と話をするときには注意しなくてはならないと思う。集落の中で観音様あるいはお地藏様のことを訪ねるときはなおさらだと思う。

石の仏に見る隠された顔

石仏が持つ錫杖

このような石の仏様の表情、持ち物を検討してみると不思議なことに気がつく、石の仏が必ずしも仏教的な姿を顕しているとは言えないのだ。これは仏教的でありながらも、仏教的と言えない石仏の認識の始まりであった。道端の石仏、お寺の境内の石仏、全てがそうだとは言わないが、持物、衣・装身具に注目していくと気になることが現れてくる。気になることは些細なことから始まる。気にしすぎ、あるいは深読みではないかという意見もあるが、少し拘ってみよう。一般的に薬師如来は薬壺やくこを持っている。正観音は水瓶、あるいは蓮華を持ち、宝冠を頭にしている。また宝珠一面観音などがある。特に十一面観音や千手観音は手が多いだけに持ち物の数は多く、興味深くなる。ここでは錫杖などの持ち物に注意を払いながら見ていくことにしたい。

錫杖は注意すべき持物であっ



図=1
貞享四年(1687)
小牧・観音山

た。錫杖の頭部、円形その部分は、彫刻しにくいところかも知れない。だから、ときには丸いものが三つあるように見えるものもある。しかも風化によって明確な形状を見ることができないこともあるが、丸い三つの形状は三位一体を象徴しているように見えることもある。だが、注意しながら錫杖の大きな輪の中を検討すれば、思いもかけない形でそこに十字架を見ることが出来る。筆者はこれまでキリシタンに絡む可能性を指摘した論文^⑧を著しているので、詳細はそちらに譲るが、石仏の持物および意匠については「十字架」を含め、検討すべき課題が多々ある。図11は、現在では新城市になっているが、鳳来町四谷のヨラキ（与良木とも書く）峠のものだが、この峠道は旧伊那街道になるといふ。この三十三観音が手にする持ち物の考えるだけでも興味深い。ここでは、図11と、図12に見る錫杖の頭部の違いを示すために掲載しておく。ヨラキ峠のものは左にH状のものを持つが小牧・観音山のもの（図11）にはない。更にヨラキのものには右手の錫の中に十字架状のものが確認できる。これは小牧・観音山のものと同じである。ただ、地藏と十一（あるいは千手）面観音の違いはあるが心の拠り所の問題であろう。実は、ヨラキ峠の観音像を検討している過程でこの地の観音群の眼と鼻梁の関係に気がついた。影像是、やや上から撮っているんで判りにくい、ある角度に位置すれば顔に十字架が形成されることである。



図=2 ヨラキ峠（四谷）観音群の三番目右手の錫杖の形状

これまで、幾多の石仏あるいは石の仏を見、写真などを撮ってきた

のだが、「キリシタン文化の痕跡」では？と意識したことで、石仏の再検討が必要になった。すでに見たことのある石仏、写真に撮り溜めてある石仏などは、錫杖、お顔などは、当時の意識の中で撮ってあるため、今の視野とは全く異なっていて、風景の一部としてしか見ていなかったことが判る。言うなれば、見るこの意味、見るこの意識を確認したと言える。かつての影像是、頭の中では道の端にある石の仏に過ぎなかった。だから、見方も甘く、遠方からの全体像でしか見ていなかったものが多い。そのため、当時の意識の下で撮った石仏を、今の意識で見直さなくてはならなくなる。もちろん何気なく撮影したものの中にも、資料として用いることのできるものもあるが、やはり意識の違いは大きい。その当時は全く意識して見ていなかったのだから、差は大きい。ここで触れる地藏の持つ錫杖、その頭部の意匠は一瞥するだけでは十字架とは認識しがたいかもしれない。それは、この意匠が「錫杖」、つまり仏教文化のものだという意識の下での視界に他ならないからである。筆者は、この種の十字架を持つ錫杖を、愛知県東栄町、下田の長養院（図2の錫杖）等の石仏から気がついた。すでに、イエズス会の紋章を意図するH状の杖の存在は別稿で指摘してあるが、この種の錫杖の頭部の意匠について発表の場では、「見方による」のではないかと言う意見をいただいた。また、石仏の顔にも、見る角度によって（仰ぎ見ると）鼻から目にかけて十字架が浮かび出るといふ事実も指摘したが、前提として東三河から浜名湖北に懸けて「隠れキリシタン」が居たとする根拠が薄いのでは、と言う指摘を受けた。事実、隠れキ



図=2 東栄町下田・長養院・六地藏の一つ

リシタンと言えは長崎、島原の話が有名である。だが、江戸時代末から明治に懸けての大浦四番崩れの信者達が名古屋藩に送られて来たのである。また、寛文元年(1661)美濃国可児郡塩村、大田村で始まったキリシタン検挙は約十年余続き、多数の信者が検挙され、処刑されている。そのことについては註③であげた資料でも触れている。だが、歴史的に天正十五年(1587)パシオ神父が三河で布教活動をしたのが最初とあり、さらに慶長十六年(1611)関東から戻る途中の伏見の宣教師が、美濃、尾張、三河、駿河、武蔵を訪ねて成人二百七十九名が受洗したと記している。キリシタン禁令後、三河地区での弾圧が厳しかったことが、しるされている。その記述は寛永八年年のものだから、ここで扱う事柄とかけ離れているかも知れない。だが、それ故にキリシタンであることをしつかりと秘匿し三河という地域と、外(三河以外)との繋がり様々を模索しようとしたのではなかつたらうか。ここでは筆者が眼にきた石仏の実例を中心として、弾圧を受けてきた人々の信仰の痕跡を東三河から中仙道に懸けての石仏の意匠に重点を置きながら、キリシタンの要素を石仏から考えて見ることにする。

石の仏に見る隠された顔



図=4 古戸・普光寺 58/18



図=3 古戸普光寺脇 石仏群の一つ 観音像か? 高60/18cm

だが、風化などで石仏の頭部が他の石仏と置き換えられている可能性も否定できない。たまたま、胴体と同じぐらいと言う理由から異質の仏同士が合体させられているのではないかと、と言う事例に出会うこともある。例えば図113と図114は表情、大きさから見て同じ六地藏の仲間と見てしまったのだが、図113は手の数から考えると地藏とは見ることができない。しかし、同じように並べられていると見間違えても可笑しくない。だがこの石仏は首がすげ替えられている可能性がある。

ところで、この種の石仏の持物、そこに見る「十字架」などの意匠は丁寧調べると、意外に多いのである。初めは、この地域だけの特徴かと考えていたが、単に意識しなかっただけのようだ。同じように、石仏の表情に注目すると、これまで意識しなかった世界が出現する。図113の古戸の石仏は、手の数から考えると六臂と見受けられる。合掌し、宝珠を持ち、左手に錫杖を持つ姿は観音と見なすべきであろう。だが、注目すべき点は、その顔にある。眼と鼻梁で十字架が構成されているのである。眼の線が細いことから偶然と見ることもできようが、左の手にある錫杖が問題となる。図114のような地藏もまた存在する。この地藏は、同じ大きさの地藏が他にもある事から六地藏の中の一体と見なすべきであろう。だが、図113のように一回り小さい地藏と同じような顔の作りになっていることは、先ほど触れたように首と胴体のすげ替えが行われ、補修されていた事実も否定できないのである。つまり、東栄町古戸の石像群に限らないが、石仏の問題はいくつものリスクを背景に有していることを意識していなくてはならない。そして石仏は、その持物である、錫杖だけではなく、顔の造りなどにも十字架などの意匠を隠していることを意識し検討していかなくてはならない。古戸には天保十一年(1840年)の銘文を持つ地藏もある。ただ年号から新しいと言えるが、この時代の石仏がこのような造

石の仏に見る隠された顔

作をもつ事は興味深い。

東栄町に限らず、多くの石仏は風化し、苔生しているものが多くて、顔をしっかりと見る事ができない。た



図= 5 h34/w15cm
天保11年の銘錫杖の中に
十字架 古戸・普光寺脇

だ、眉毛や、眼の輪郭から考察するのみであるが、顔に十字を持つと考えることのできるものはいくつか出てくる。

錫杖の中の十字架状の形に注目すると、東栄町では先述の下田の長養院の六地藏にも同様のものがある。また、古戸にはもう一つ大きさは三分の一度石の地藏の錫杖にも十字架を見ることが出来る。ただ、六臂であることと、右手に小ぶりの錫杖を持つことは興味深い。

顔面に見える十字架

著者は、十字架を顔面に持つ石仏の事例を鳳来町四谷の方瀬にあることを指摘した。一見通常に見える石の仏の表情が、見る角度と光度合いによって変わることを目の当たりにしてきた。四谷、方瀬の事例は明治十二年のものであるが、それはキリスト教が布教される以前のものである。かつての鳳来町海老の住人が横浜まで出向き、受洗し仲間を増やすのはこの何年か後の話であるが、そのことは別稿で触れている。

この顔面の十字架は、石仏と見る側が同じ目線上に立っては見ることはできないと言えよう。やや、見上げるような角度が不可欠だと思慮する。その前提に立てば、鳳来町与良木峠の石仏群の多くは再検討

しなくてはならないこととなる。カメラの視線がやや上からの角度であったからだ。予良木峠の石仏群の再検討は別にするが、ここでは顔面に十字架を持つ事例が他にないかを検討して見たい。

ところで、この図115

中津川市阿木の思惟観音であるが、実際に触れてみても鼻の脇には膨らみは存在しない。光線の加減なのかも知れないが、この種のを路傍に見ることは不思議なことである。



図= 6
新城市鳳来町方瀬
左肩に明治12年の銘文あり

さて、蛇足となるが、筆者が石仏の顔面に十字架が存在すると意識する切っ掛けとなったのが、図116の石仏である。この石仏は新城市鳳来町四谷方瀬のものであるが、かなり山を登ったところにあるが、これも旧の伊那街道である。この石仏は、初めは十字架など見えなかった。だが、数歩移動し振り返ったとき、光の加減か何かで顔面に十字架が在ることに気付かされたのである。同じようなことは、先ほどから触れている東栄町古戸の石仏にも該当すると言えよう。眼と鼻で十字架の構成を考えるか、眼から眉にかけての顔面に十字架の構造を見るかの



図= 5 h60/w28cm
岐阜県中津川市阿木大根木
顔は15センチほど

違いがある。ここでは視点を東栄町のみ限定することなく各地の石仏を通して幅広く考察しながら見ていけるようにしたい。とりあえず、東栄町の古戸から離れて検討することに

したい。図115は中津川市と岩村の境に近いところの石仏である。中津川市阿木大根木の長楽寺から岩村方面への途上、風神社に向かう三叉路の脇にある石仏群の一つで、思惟観音である。この石仏の小鼻から左右に膨らんだような形状を見ることが出来る。しかし、実際に顔面に触れてみても手には何も触らないのである。膨らみのあるように見える、しかし何もそこには存在しない。石質も何も問題ないように見受けられた。この種の細工は意図的にな



図=8 光前寺三門脇 思惟観音 67h/28w・cm



図=7 長野県駒ヶ根市 光前寺三門脇・地蔵の坐像 66h/55w・cm

されたのか、あるいは偶然なのかは判らない。しかし、この種の細工(?)は、単に正面から見るだけでは気がつかない。石仏と同じ目線、あるいは石仏の顔を見上げるといって視線を取ったときに、あるいはやや異なった視野から眺めたときに見える物なのかも知れない。そこには我々の意識の問題が隠されていると見るべきであろう。

石の仏に見る隠された顔

長野県駒ヶ根市赤穂にある光前寺の三門脇にも、興味深い石仏(図117)がある。高さは66センチ/幅55センチほどの丸彫の地蔵の坐像であるが、これの顔に十字架を見ることが許してもらえらるだろう。鼻梁と眼の形を合わせると十字架となるのである。この三門脇には地蔵の坐像を中心として、石像は五体、石碑一体がある。地蔵の左には風化しているが観音像が二体、そのうち一体は首がないものである。さらに右に思惟観音があり、肉髻相の薬師が施無畏印を結ぶ。薬師と地蔵の間に位置する思惟観音は、その身体の歪みに興味を惹かれた。多くの思惟観音は背筋を伸ばして毅然と座しておられるのに対して、ここのものは半分眠っているかのように見えた。つまり、この思惟観音は異質な趣を持つ。背筋が伸びていないのだ。だが、顔面には顔の傾きに合わせることの十字が刻まれている(図118-1、2)。



図=8-2 光前寺 三門脇思惟観音 67h/28w・cm



図=9 足込(東栄町慶泉寺内)

しかし、細く彫られた眼は、鼻梁と合わせるとしっかりとした十字架ではなく、X状の十字に見える。この見方が、果たして支持を受けるか、どうかは判らない。しかし、X字型も十字架に含めることは可能であろう。

だが、石仏の異様な形が

石の仏に見る隠された顔

人目を惹くことは紛れもないことである。ここには意図的な意味合いが隠されていると考えたい。石仏の顔に、十字架を想定することに問題を指摘されることは承知している。特に、眼が細く、平行に彫られていれば当然のように「十字架になる」と指摘を受けるであろう。だが、半眼の石仏も数多くあり、石工によって、眼にも様々な表情が彫られることから一概に否定できるものか、検討が必要であると理解している。図11は愛知県北設楽東栄町足込地区の慶泉寺にある六地藏(一体型)の一つである。銘文からは元禄二年(1695)のもの。しかし、この地藏で顔面に十字架を想定する人は居ないだろう。ただ、錫杖の中に十字架を見ることが出来る。この石工の名前は不明であるが、この作風を持つ石仏は東栄町界限では意外に多い。月の清平寺、三輪の長養院、新城市川合の乳巖山智蔵寺などで眼にできる。さらに眉から額に懸けてのT字型構造にも十字架を想定することも可能となろう。ここでは、愛

知県北設楽郡東栄町月地区の引田の観音堂脇にある子抱き地藏を例としてあげておくが(図10)、鼻梁から額に懸けての構造がT字型を構成し、顔の彫りの深さと十字架を見せてくれる。T字型のも

の構造がT字型を構成し、顔の彫りの深さと十字架を見せてくれる。T字型のも



図=11 駒ヶ根市中沢
桃源院参道地藏?



図=10 月・引田観
音堂脇
子抱き地藏

のも含めて十字架状の構造と想定してきたい。この問題については、詳細は稿を改めたい。

駒ヶ根では、このほかにもいくつかの石仏に出会っている。百華山桃源院(駒ヶ根市中沢本曾倉)

(図11、11-1、12)のものは眼の辺りの窪み等に注意を払うべきである。この形状が光則寺の図7のものに類似してくるからである。さらに、眼の周囲の彫り方は石工の違いに依るのである。この桃源院は、まだ十分調査

ができていないのだが、この地域ではキリシタンに関連する伝承が残っている事を指摘しておきたい。この桃源院の石仏群で、参道および裏手の墓地で見かけた



図=13 桃源院・裏手の墓地
如来像 釈迦? h60ca

この桃源院の石仏群で、参道および裏手の墓地で見かけた



図=12 桃源院
参道地藏・立像



図=11-1
頭部の拡大桃源院参道

石仏(図11、12、13、14)は興味深い。しかし、年代はすべて不詳である。

さらに長野県駒ヶ根市の神寶山善福寺の三十三観音は、その冠に注目したいものがある。図14、お

よび16に見るように手には十字架を見ることができただけではなく、冠は宝冠をイメージさせてくれるのみならず、その構造から三重冠を連想させてくる。三重冠とはローマ法王の冠のことであるが図12、14にその姿を重ねることも可能であろう。もちろん、日本の石

工達が見たわけではない。彼らなりに考察を重ねた結果のことだと言わざるを得ないが、ここには日本的変容を考えることが可能である。

図13のような構

石の仏に見る隠された顔



図=16 善福寺三十三観音15番



図=15 駒ヶ根・神寶山善福寺 三十三観音の12番目



図=14 桃源院・裏手の墓地 地藏 h48ca

造はあまり見ないが14図と関連させれば一般的とは異なる世界を垣間見ることができよう。また、この善福寺の石仏群にも著者は十字架の意匠の存在を想定している。石仏の顔の十字架、手にした錫杖

などの十字架、それが仮に東三河に限定されるものであれば地域的特性として片付ける事ができたかも知れない。もちろん、それには「石仏の顔面に十字架を見ることができるとする前提、H字型の十字架をイエズス会の紋章と想定してのことだが、木曾川上流でも、このような石仏の見方が可能となれば隠れキリシタンに対する見方、石仏に対する意識は大きく変化することになる。つまり、隠れキリシタンの問題は何も長崎周辺だけのことではなく、東三河から街道沿いに深く広く展開していた可能性を伺わせてくれる。



図=17 善福寺三十三観音17番

註

- ① 鷲塚泰光編『日本の美術 第147号』至文堂 昭和53年 はしがき
 ② 拙論(一)「石仏幻想の路——三遠信にキリシタン文化を探して——」『言語・文学・文化』 第十三号 東海学園大学 平成二十六年
 (二)「石仏に見る隠された背景」『東海仏教』東海印度学仏教学会
 平成二十七年

|||||註|||||

石の仏に見る隠された顔

③ カトリック名古屋教区殉教者顕彰委員会編 『東海・北陸のキリシタン史跡巡礼「あかしする信仰」』2012 42頁、キリシタン文化研究会編 『キリシタン研究』第21輯 昭和56年「名古屋藩預け浦上信徒の牢死者埋葬跡」 青山玄7〜14頁

美濃国のキリシタン検挙と捕縛については、同書7〜30頁にかけて古文書を引用した記述がある。ただ、三河でのことについては前掲書21〜23頁による。

三河地区のことについては、前掲書23頁。レオン・パジェスの『日本吉利支丹宗門史・下』に寛永八年(1631)「三河で五人、御油で五人、吉田で二人、牛久保で一人、丸山で一人、千々岩(新城カ ママ)で二人の殉教者があった」としている。

④ 拙論「石仏に見る隠された背景——石仏のイコノロジー——」『東海仏教』第六十輯 平成27年3月

⑤ 編唐澤貞治郎『上伊那群誌』名著出版社 昭和48年 567〜568頁
寛永四年の話として、加賀国の浪人がキリシタンとして訴えられ処刑されるが、その子供は蔵澤寺の和尚乾安音貞に引き取られる。このとき、訴人には桃原寺(上伊那群誌)の和尚が同道したとある。現在の寺は曹洞宗の寺である。

(本学人文学部教授)